

彼女たちの肖像

会期：2026年4月14日(火)～6月14日(日)



展示目録

※都合により展示の内容を一部変更することがあります。作品目録の番号は作品の並びと異なります。

番号	作品名	制作年	年齢	縦×横(cm)	号	技法・材質
1	自画像	1925(大正14)	20	30.5×22.0	3F	油彩・キャンバス
2	風景	1920年代		24.5×33.5	4F	油彩・キャンバス
3	三岸好太郎「風景」	1931(昭和6)頃		31.8×41.2		油彩・キャンバス
4	室内風景	1930年代		38.0×25.0	変6M	水彩、ペン・紙
5	室内	1940年代前半		162.3×97.0	15M	油彩・キャンバス
6	室内Ⅱ	1940年代前半		80.5×100.0	40F	油彩・キャンバス
7	花	1952(昭和27)	47	45.8×33.5	8P	油彩・キャンバス
8	花	1952(昭和27)	47	52.5×45.0	10F	油彩・キャンバス
9	花	1960年代		27.3×27.3		油彩・キャンバス
10	花の図	1960年代		53.0×45.5	10F	油彩・キャンバス
11	鳥と琴を弾く埴輪	1957(昭和32)	52	97.0×130.3	60F	油彩・キャンバス
12	静物	1958(昭和33)	53	65.0×80.5	25F	油彩・キャンバス
13	アンダルシアの坂道	1987(昭和62)	82	100.0×65.0	40M	油彩・キャンバス
14	坂の上へ(アンダルシア)	1987(昭和62)	82	92.0×73.0	30F	油彩・キャンバス
15	谷桃子氏肖像画(習作)	1956(昭和31)	51	66.0×60.5		水彩・紙
16	貝谷八百子氏肖像画	1957(昭和32)	52	45.5×38.0	8F	油彩・キャンバス
17	浜村美智子氏肖像画	1958(昭和33)	53	45.5×38.0	8F	油彩・キャンバス
18	小川マリ「婦人像」	1934(昭和9)		116.7×90.9		油彩
19	小川マリ「静物」	1956(昭和31)		50.0×65.2		油彩
20	桜井滨江「赤樹」	1982(昭和57)		162.1×260.6		油彩
21	小さな村	1988(昭和63)	83	73.0×60.0	20F	油彩・キャンバス
22	さいたさいたさくらがさいた	1998(平成10)	93	130.0×160.0	100F	油彩・キャンバス
23	「女人短歌」創刊号 表紙絵原画	1949(昭和24)		27.3×19.0		油彩・紙
24	「女人短歌」127～134号 表紙絵原画	1981～82(昭和56～57年)		37.5×28.0		油彩・紙
25	自筆原稿「絵画するところ 充実の生命」 原稿用紙11枚	婦人公論(年代不明)掲載				
26	「蠟人形」 昭和12年8月号 昭和13年3月号 昭和13年6月号	1937～1938(昭和12～13年)				
27	「女人短歌」創刊号、127号	1949・1981(昭和24・56年)				
28	「週刊朝日」 昭和31年1月8日号(表紙：谷桃子氏肖像画) 昭和32年3月17日号(表紙：貝谷八百子氏肖像画) 昭和33年3月16日増大号(表紙：浜村美智子氏肖像画)	1956～58(昭和31～33年)				

15…寄託作品 9、10…武田薬品工業寄託作品

彼女たちの肖像

三岸節子が描いた3人の女性の肖像画とともに、小川マリ、桜井浜江といった同時代に活躍した女性画家の作品を取り上げます。時代の中を駆け抜けた女性たちの姿をご覧ください。

表紙コンクール「日本の女性」

1951～58(昭和26～33)年に雑誌『週刊朝日』の企画として、名だたる画家が週替わりで表紙を描き、原画は読者にプレゼントされました。節子にはこれに第1回、第4回と参加していましたが、第6回、第7回、第8回のテーマは「日本の女性」で、節子には珍しく人物画を手がけることになりました。

「日本の代表女性を描くか、描かないとすればモデルに回れという、そのいずれかと問いつめられれば、みずから絵筆持つ身、人物をもっとも不得手としながら、ついにブテイにも描く側になりました」*1

と自虐とユーモアを交えたコメントを残しています。

谷桃子(1921～2015)(No.15)

バレリーナ、振付家。はじめモダンダンサーとして活躍するも、25歳の時にクラシックバレエに転向。東京バレエ団に参加。1949年に谷桃子バレエ団を結成。日本バレエ協会第3代会長。

貝谷八百子(1921～1991)(No.16)

バレリーナ、振付家。13歳でエリアナ・パプロバに師事し、17歳でデビュー。東京都世田谷区松原に貝谷八百子バレエ研究所(後の貝谷バレエ団)を設立。戦後も日本バレエ界を牽引した。

浜村美智子(1937～)(No.17)

歌手。1957(昭和32)年、デビュー曲「バナナ・ポート」が230万枚を超える大ヒットを記録し、カリプソブームを巻き起こす。同年のNHK紅白歌合戦に出場。



《貝谷八百子肖像画》1957年 ©MIGISHI



《浜村美智子氏肖像画》1958年 ©MIGISHI

女性画家の群像

小川マリ(1901～2006・札幌市出身)(No.18、19)、桜井浜江(1908～2007・山形市出身)(No.20)は、三岸節子と同じく、女性が絵を学ぶ機会が少なく、展覧会に出品しても認められづらかった時代から絵を描き続けた女性画家です。1934(昭和9)年には、ともに三岸節子ら独立美術協会に出品する女性画家11人が結成した女^{じょ}紳^{しん}会に参加しました。戦後、2人は女流画家協会展に出品を重ねる一方、小川は1950年に女性初の春陽会会員に、桜井は1954年に独立美術協会会員になるなど、女性画家の第一線で活躍しました。

分身の花

「生涯で自信のもてる花一枚が描ければと思っているの。私の見た、感じた、表現した、私の分身の花を。その一枚のために何千枚も試みて生きてゆこうと。アトリエの花も生身の私も未完成なんです。」*2

節子が1925(大正14)年の第3回春陽会展で初入選した4点の内、1点は山茶花を描いたものでした。以来、何百、何千という花の絵を描き、花は節子の代名詞になりました。節子にとって花は自分自身の分身であり、その肖像であつたともいえるでしょう。

*1 『週刊朝日』1956年1月8日号、85頁

*2 『三岸節子画文集 未完の花』1994、求龍堂、94頁